

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：34205

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24500769

研究課題名(和文)アスリートのキャリア発達に向けての介入方略の質的検討

研究課題名(英文)A qualitative study of the career developmental intervention for Athlete

研究代表者

豊田 則成 (Toyoda, Norishige)

びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・教授

研究者番号：00367913

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は4か年計画の下、アスリートのキャリア発達に関連した先行研究を概観し、質的研究方法を熟達しつつ、アスリートのキャリア発達における発達課題の克服を目指した専門的介入方略を構築し、その効果を検証するといった研究課題を設定し、遂行した。特に、本研究では、【経験の記述】 【概念の見える化】 【概念の相対化】 【議論】といった個性記述的アプローチを援用したキャリア発達支援プログラムを実施した。そして、複線径路等至性モデル(TEM)を利用して、元オリンピックのキャリア発達過程について検証した。その結果、オリンピックのキャリアアトランジションの意味について可視化することができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was (1) to overview some past studies about career development of Top Athlete, (2) to know the qualitative research method well, (3) to develop new career developmental intervention for Athlete, and (4) to qualitative test the new intervention. Particularly, in this study, the new intervention were idiographic method that utilized to support the Athlete's career development. It was four steps, (1) to describe of one's life, (2) to make some categories to explain about one's experiences in career development, (3) to examine the relationship among the categories, and (4) to argue about the in-depth relationship. Trajectory and Equifinality Approach (TEA) was conducted to investigate the career development process between some ex-Olympian. Consequently, the meanings of career transition for Athlete were made clear.

研究分野：スポーツ心理学

キーワード：アスリート キャリア発達 介入方略 質的検討 インタビュー

1. 研究開始当初の背景

まず、国内外の先行研究を概観してみると、欧米諸国では、1980年代からアスリートのキャリア発達を支援する (career assistance for Athlete) ための研究が活発に展開され、その成果を背景に専門的な介入方略が実施されてきている。特に、キャリアトランジション (現役選手 引退後の生活) のプロセスを3段階 (移行前 移行中 移行後) に分け、それぞれの具体的な方略を明示し、一定レベルの成果を残してきている。

一方、国内においては、2000年に日本オリンピック委員会やJリーグが現役アスリートのキャリア支援プログラムを開始し、継続的な取組をしている。しかし、その根拠となる実践的研究は希少な現状にあるといわざるを得ない。そのような意味から、本研究の成果は、国内外の研究実情を補完する役割を果たすと考えられた。

特に、国内の現状を鑑みると、アスリートの生涯発達を捉えるための科学的理論が十分に検討され、実践されているとは言い難い。その理由として、1) 既存のキャリアサポートプログラムは、アスリートキャリアからセカンドキャリアへの移行のみに焦点を当てるにとどまっていること、2) 国外のケースを模倣するに留まり、我が国独自のサポートプログラムの構築・実践が立ち遅れていること、などが挙げられた。

ちなみに、そもそも本研究者は、平成12年度 筑波大学 博士論文において「アスリートの競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関する研究」に取り組み、これまでアスリートの現役引退に伴うキャリアトランジション支援に向けてメンタルサポートの立場から検討を重ねてきた。一連の研究から得られた成果として、(1) 引退後の適応様態をアイデンティティ再体制化の観点から類型化し、(2) 引退後の適応に至るまでの心理プロセスを同定し、(3) 引退後の生活適応へ向けての具体的な提案を提示した。

その後、平成16-18年科学研究費補助金 (若手研究(B)) 「アスリートの「転機」に関する研究 自己物語的アプローチから」 (課題番号: 16700476) に着手し、キャリアトランジションをアスリートにとって免れ得ない「転機」として捉え、その特徴を明らかにし、続いて、平成21-23年科学研究費補助金 (基盤研究(C)) 「アスリートのキャリアトランジションに伴う発達モデルについての質的検討」 (課題番号: 21500615) (最終年度) においては、元オリンピックの事例から、アスリートのキャリアトランジションに伴う発達モデルを提示した。このようなことから、本研究者は、本研究に関連したテーマに対し、一貫して取り組んできている。そのような背景から、本研究は、一連の研究成果を受けた発展継承的な取組であるといえる。

とかく競技力向上に過度に傾倒されてしまうスポーツ科学の領域において、本研究のようなキャリア発達 (career development) に着目して、アスリートの引退後の人生を包括的にサポートすることは斬新な取り組みであるといえ、昨今のスポーツ立国戦略、スポーツ省設置などのスポーツを取り巻く社会情勢を鑑みる上でも重要な意義を有する。

また、本研究は質的研究法を駆使した研究であり、目前の現象をクロノロジカルな外的事実として捉えるのみではなく、個々のアスリートにとっての意味や捉え方といった内的事実 (心理的時間) に着目して検討することは大きな意味があると考えられた。すなわち、個々のアスリートの語り (narrative) から導き出された内的事実を丁寧に解釈することを通じて、個人の内的世界の理解を深めることができると考えられた。

総じて、このような手法による研究は、かなりの骨折りが予想されるが、それ故に、個人の内面を着実に捉えていくことになるといえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、4カ年計画の下、アスリート (高度な競技的関わりを有するスポーツ選手の総称) のキャリア発達に向けての専門的な介入方略について質的に検討することにある。この目的の達成のために、本研究は次のような4つの研究課題を設けた。すなわち、1) アスリートのキャリア発達に関連した研究の概観、2) 質的研究方法の習熟に向けた文献の概観およびスポーツ心理学領域へ有益な提案をなすこと、3) アスリートのキャリア発達における発達課題の克服を目指した専門的介入方略を構築すること、4) アスリートのキャリア発達における専門的介入方略を実施し、その効果を検証すること、などであった。

3. 研究の方法

本研究は、上記4点の研究課題を解決すべく、大きくは3つのアプローチを行った。

先行研究の概観

研究手法の熟達: 質的研究法に関連する先行研究を概観・整理することで、研究手法の熟達を目指した。このことによって、調査の観点や進行方法、タイムスケジュール、インタビューの仕方や観察記録の取り方など、一貫性かつ柔軟性を有する調査マニュアルを作成することができた。

アスリートのキャリア発達に関する研究の概観: この研究テーマの先行研究を概観し、整理することによって、アスリートがキャリア発達に伴って直面する課題を予測する。特に、レビンソン (1978) やブリッジズ (1980) によって、人生における過渡期に着

目した一定レベルの発達モデルが導き出されている。

インタビュー調査

キャリア発達における心理・社会的発達課題の検討：研究対象を元日本代表級アスリート 10 名として、調査マニュアルを作成し、それを基に、集中的な面接調査を実施した。その際、その面接資料から、1)「語り」の表象的特徴を分析し、2)会話分析によるアスリートのキャリア発達における課題や意味づけ、体験様式等を明らかにする。

研究成果を踏まえた支援プログラムの構築とその効果の検証

上記の研究成果を受けて、事例的に支援プログラムを構築し、その効果の検証を試みた。次の研究成果に示す通り、アスリートのキャリア発達における経験を分厚く記述し、そこから有益な概念を導き出し、概念間の関係を検討し、考察することを通じてフィードバックを行った。そして、【経験の記述】 【概念の見える化】 【概念の相対化】 【討議および議論】といった個性記述的アプローチを援用したキャリア発達支援プログラムを実施した。

4. 研究成果

ここでは、特に、下記の1)から4)の研究課題に対応した研究成果について示した。

1)アスリートのキャリア発達に関連した研究の概観

端的に言えば、この種の先行研究の概観から次のような5点の知見を導くことができた。アスリートの個性記述的なデータを扱ったものは非常に少なく、今後、事例研究を含めた質的検討の積み重ねが必要となる。アスリートの生涯発達に考慮した支援方略は既に実践レベルで成果を残してきているものの、その成果の個性性や特殊性への配慮から、議論に制限が加わることを免れ得ない。文化的背景に強い影響を受けることが多い領域であることから、文化心理学的アプローチの必要性がある。本研究課題を一貫し、継続的に議論するコミュニティの形成が課題である。臨床スポーツ心理学といった新しい領域において本研究課題は中心的なトピックのひとつとなりうる。

今後は、このような知見を活用し、本研究課題を発展継承的に議論する場の設定を課題としたい。

2)質的研究方法の習熟に向けた文献の概観およびスポーツ心理学領域へ有益な提案をなすこと

質的研究方法の代表的な手法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)や修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)、複線経路等至性モデル(TEM)、質的統合法などを援用した先行研究を概観

し、質的研究方法の習熟を試みた結果、次の5点のように、本研究の分析方法をスポーツ心理学領域に援用できると考えた。

すなわち、構造構成主義に基づく認識論は、個人の語りから個人の体験を可視化することに寄与し、特に、「プロセスとしての構造」や「メカニズムとしての構造」を丁寧に記述することから、個人の内的世界に接近することが可能となる。研究対象となる事象を分厚く記述し、幾つかの有益な概念として可視化し、そして、その概念間の関係を相対化することを通じて、当該現象のより深い理解を促すこと(議論や考察)が可能となる。概念図として提示することを通じて、研究成果を可視化することは、当該現象に関わる個人が位置する「場」を特定し、そのことをきっかけとして、議論の「場」を形成していくことになる。端的に言って、図式による研究成果は、多くの読者に共有され、現場での追試を実現することが可能となる。このような取り組みにより、現場にある「身体知」や「暗黙知」を、ひとつの「形式知」として「象る」ことができ、発展継承的に議論することができようになる、という知見をまとめた。

3)アスリートのキャリア発達における発達課題の克服を目指した専門的介入方略を構築すること及び4)アスリートのキャリア発達における専門的介入方略を実施し、その効果を検証すること

これら2つの課題解決は、【経験の記述】 【概念の見える化】 【概念の相対化】 【討議および議論】といった個性記述的アプローチを援用したキャリア発達支援プログラムを実施した結果、下記のような実践研究としての成果を得ることとなった。

研究題目：オリンピックでなくなることの意味とは何か—質的統合法を用いた体験の可視化を通じて—(日本体育学会 第65回大会にて発表)

(1)目的

「オリンピックでなくなることの意味とは何か」というRQの下、質的アプローチを行い、発展継承可能な仮説的知見を導き出すことを目的とした。

(2)方法

調査対象：元オリンピック(引退後20年以上経過)

調査方法：1対1形式の半構造化インタビュー(1-2時間程度)を7回実施した。

調査内容：調査の趣旨を説明し、承諾を得た後、引退に関連して生じた感情や悩み等の会話内容をICレコーダーに収録し、逐語を起こし、インタビュー資料と位置づけた。

分析方法：KJ法(川喜田,1986)を継承した質的統合法(山浦,2012)を採用した。手続きは、次に示すような9ステップによって構成されている。すなわち、それは、Step 1:

ラベルづくり, Step 2:ラベル広げ, Step 3:ラベル集め, Step 4:表札づくり, Step 5:グループ編成, Step 6:見取図の作成, Step 7:本図解の作成, Step 8:シンボルモデル図の作成, Step 9:叙述化, であった。

(3)結果(最後尾の Fig.1 を参照のこと)

上述にある質的統合法を実施した結果, 11 カテゴリーを生成し, 4段階プロセス(オリンピックでなくなるこの意味とは何か:見取り図)を導き出した。

ちなみに, 生成された 11 カテゴリーは, 下記の通りである(カテゴリーに ID を付し, 「...」には具体的な語りのエッセンスを提示した)。

- C.01 **限界感**:「もういい歳だし, これ以上競技を続ける訳にはいかない」「若い時のようにはいかない」「怪我の影響で思うように動けない」
- C.02 **競技への未練**:「こう見えて, 私はトップのプライドがある」「日本を代表する存在だ」「誰にもこの座を譲りたくない」「私より努力している人はいない」
- C.03 **孤独感**:「誰も私のことなんか, わかってくれない」「実は, 私はやってはいけないことをやってきたのかも」「誰も助けてくれない」「引け目を感じた」
- C.04 **見通しのなさ**:「自分がこの先, どうなっていくのかわからない」「選手以外の自分を見通せない」「本当の自分じゃないような感じ」「将来が見通せない」
- C.05 **違和感**:「うまく言えないけど, 私は周りとうまく言えない」「変に冷めているってどうか」「今の自分に手応えがない」「今の自分は本当の自分じゃない」
- C.06 **流される**:「なんだかんだ言っても, 結局やるしかない」「つべこべ言っても始まらないから」「郷に入れば郷に従え」「とりあえず, やってみるのもいいかな」
- C.07 **感謝する**:「結局, いろいろな人に支えられているのだから気づいた」「私は独りじゃないのに, 勝手に独りだと思いついていた」「有難いと思う」
- C.08 **新たな関係**:「新しい友達ができた」「競技以外の人と話をすると新鮮で発見がある」「最初は, 避けていたのだけど, そのうち, 打ち解けてきた」
- C.09 **価値の拡大**:「できないことも, やればできるのだ」「引け目を感じていたけれど, そうでもない」「私らしくあることが大切なのだ」「なんでもやれる気がする」
- C.10 **新たな機会**:「今までやってこともないような, やりたいとも思わなかったこと」「恥ずかしいって思わない」「今までやらなかったことも, 普通にできる」
- C.11 **新たな挑戦**:「競技以外の世界をもっと知りたい」「こんなことや, あんなことも, やろうと思えばなんでもできる自

分」「今の自分も結構, 満更でもない」次に, 上記のカテゴリー間の関係を検討し, 4段階プロセス(**自分が自分でなくなっていくことへの不安, 新たな生活様式への受け入れと適応, 新たな関係性の構築による価値の拡大, 新たな機会や挑戦への期待**)を導き出した。

(4)考察

上記の概念間の関係を検討した結果, 「オリンピックでなくなるこの意味」について次の4点を導き出した。

自分が自分でなくなっていく不安への直面化:【限界感】が【競技への未練】や【孤独感】を生み, それが【見通しのなさ】にもつながっていた。

新たな生活様式の受け入れと適応:新たな生活における【違和感】があるものの【流される】経験と【感謝する】経験を重ねていく。

新たな関係性を構築することによる価値の拡大:【流される】ことは【価値の拡大】へ, 【感謝する】ことは【新たな関係】に, 各々つながっていく。

新たな機会や挑戦への期待:【価値の拡大】は【新たな挑戦】を生み, 【新たな関係】は【新たな機会】を生んでいく。

(5)まとめ

「オリンピックでなくなるこの意味とは何か」という RQ に対して「【流される】や【感謝する】ことをきっかけにして新たな生活への適応を果たしていく」ことが導き出された。特に, ここでは【流される】経験の意味に注目したい。金井(2002)は「数年に一回訪れる節目はデザインしたい。一方, 不確実な中でも方向感覚をもっていれば, 節目と節目の間では少々流されてもいい。流れに身を任せる中で, 掘り出し物(セレンディピティ)がいっぱいあるかもしれない」と述べている。この事例もまた【流される】経験の中で, 多くの学びを得たといえる。

総じて, これまで個人の生涯発達を理解しようと試みる場合, レビンソン(Daniel J. Levinson, 1992)の生涯発達モデルをひとつの作業仮説として研究に取り組んできた。本研究もまた, 構造構成主義(西條, 2009)の立場から, アスリートの内面的変化を捉えるべく, キャリア発達モデルを導き出そうとしてきた。すなわち, 本研究の実践的側面では, 1対1形式の面接(調査)およびコンサルテーション(介入)が中心的な手法となった。これらの手法を通じて, 個々のアスリートの内的体験を丁寧に聞き出し, 彼ら/彼女らのリアリティに接近できるものと考えており, 実際, 本研究の成果は, そのような地道で, 丁寧な聴き取り作業を背景とした個性記述的な「語り」から導き出されたものと位置づけることができよう。

このような取り組みから, 本研究では, 個々のアスリートがキャリア発達に伴って直面する心理・社会的発達課題を明らかにす

ることができ、また、その克服に向けた取り組みをサポートすることの一端を可視化することができた。そして、アスリートがアスリートでなくなる歩みに同調することで、彼らの内面の変化を実感し、心理学的な考察を可能とすることができた。このような取組は、スポーツ心理学領域における質的研究の発展にも寄与するものと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 6件)

豊田則成：元プロ野球選手のアイデンティティ再体制化についての質的検討，日本体育学会第63回大会（2012年8月22-24日）東海大学

豊田則成：競技引退に伴って直面する心理社会的発達課題の検討，日本体育学会第63回大会（2013年8月28-30日）立命館大学

Norishige TOYODA: Athletes' career in Japan: Before and after retirement in sports, Asian-South Pacific Association of Sport Psychology: 7th International congress in Tokyo, Japan(2014年8月7-10) 国立オリンピック記念青少年総合センター

豊田則成：オリンピックでなくなることの意味とは何かー質的統合法を用いた体験の

可視化を通じて、日本体育学会第65回大会（2014年8月24-26日）岩手大学

豊田則成：指導環境の整備を妨げるもの、日本スポーツ心理学会企画フォーラム（2014年12月6-7日）大阪体育大学

豊田則成：アスリートのキャリア形成に伴う心理変容プロセス:引退後のキャリアに困惑するアスリートを対象に、日本体育学会第67回大会（2016年8月24-26日）大阪体育大学

〔図書〕(計 2件)

Norishige TOYODA: Chapter 11 Athletes' career in Japan: Before and after retirement in sports (Natalia B. Stambuliva and Tatiana V.Ryba: Athletes' Career Across Cultures: 128-136, Routledge, 2013.)

豊田則成：第5章アスリートの青年心理（高見和至編著：スポーツ・運動・パフォーマンスの心理学，化学同人，2016.）

6. 研究組織

(1)研究代表者

豊田則成 (TOYODA NORISHIGE)

びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・教授

研究者番号：00367913

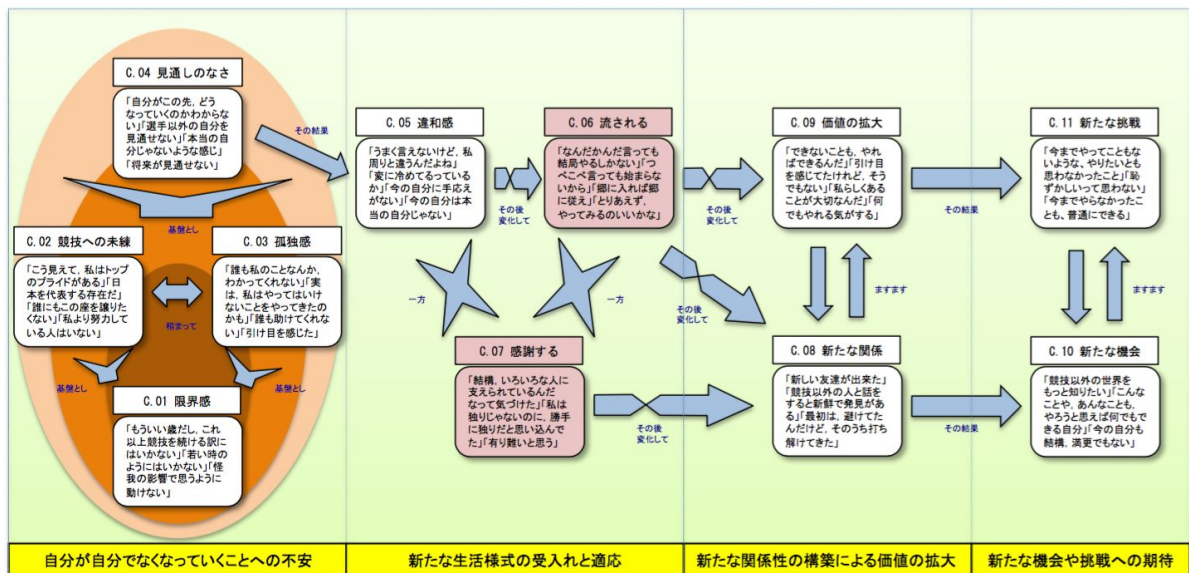


Fig.1 オリンピアンでなくなることの意味とは何か(見取図)

Tab.1 関係記号と添え言葉

